

1

不幸な日について話す男

私が最後に見たカルロス・カルバージョは、肩を落としてうなだれたまま、背中に回した両手に手錠をかけた状態で、窮屈そうに警察のライトバンに乗り込むところであり、画面の下に逮捕の理由を伝える字幕——暗殺された政治家のスーツを盗もうとした容疑——が出ていた。夜の報道番組で、けたたましいコマージュ攻勢が終わってスポーツニュースに入る直前、偶然目に止まった一瞬の映像であり、今でも覚えているのは、この瞬間にこの同じ画面を見ている視聴者が何万人いようと、このニュースに驚かなかつたと本気で言えるのはこの私しかない、そう思ったことだ。現場は博物館に改装された旧ホルヘ・エリエール・ガイタン邸であり、現在では、毎年多くの人が訪れて、束の間だけコロンビア史上最も有名な政治犯罪に思いを馳せる。展示された背広は、一九四八年四月九日当日にガイタンが着ていたものであり、この日、ナチス・シンパと目されていた若者で、ローゼンクローイツに関わっていたとも、聖母マリアとよく話し込んでいたとも言われるファン・ロア・シエ

ラは、ボゴタ有数の繁華街にあった事務所の出口でガイタンを待ち受け、雑踏のなか、白昼堂々と、至近距離から彼に向けて四発の銃弾を発射した。背広とチョッキには銃弾の残した穴が残っており、事情を知る者は、この薄暗い空虚な環を見るためにこの博物館を訪れる。

事件が起こったのは二〇一四年四月の第二水曜日だった。カルバージョが現地に到着したのは午前一一時頃らしく、その後の数時間、トランス状態に入った信者のように屋内を歩き回る姿や、刑法関連の本の前に首を傾げて立つ姿、燃え上がる路面電車や怒り狂って山刀を振りかざす人々のフィルムを繋げたドキュメンタリー——一日中何度も繰り返し上映される——に見入る姿などが目撃されている。最後に残っていた制服姿の学生たちが出て行くまで待ってから彼は二階へ上がり、暗殺当日にガイタンが着用していた背広を展示するショーケースの前に立つと、拳銃を嵌めた手で殴りつけてガラスを割り始めた。そのまま、ミッドナイトブルーの背広の肩に手を掛けたものの、それ以上は何もできず、音を聞いて駆けつけた二階担当の警備員に銃口を向けられた。その時になつてカルバージョは、ガラスの破片で手を怪我していたことに気づき、野良犬のように指を舐め始めたが、さほど傷の心配をする様子はなかった。テレビの画面では、白シャツにタータンチェックのスカートという出で立ちの若い女性が、次のように締めくくっていた。

「壁に落書きしていたところを捕まったとでもいうような様子です」

翌朝、新聞各紙はこぞつてこの窃盗未遂事件について書き立てた。事件から六六年経った現在でもガイタン神話がこんな情熱を掻き立てるといふ事態を前に、誰もがわざとらしい驚きを表明し、これまで幾度となく繰り返されてきた議論をなぞりながら、ガイタン暗殺と、すでに前年で半世紀を経過していたにもかかわらず今もまだ人を虜にし続けるケネディ暗殺とを重ね合わせる者が、またもや現れた。そして誰もが、今さらながら、暗殺によって引き起こされた予想外の事態——群衆の抗議運動で燃え上がる街、誰の指示も受けず屋根に身を伏せて無差別に発砲するスナイパー、その後数年続く内戦状態——を思い起こした。様々なニュアンスとメロドラマに彩

られてこのニュースは国中を賑わせ、怒り狂う群衆にリンチされて半裸のまま七番街道の車道を大統領宮方面へ引きずられていく殺人犯の姿など、様々な古い映像が掘り起こされた。だが、どんなメディアを探しても、正気の男が警備付きの家に踏み込んで歴史的偉人の穴開き服を無理やり持ち去ろうとした、その真の動機について、たとえあてずっぽうであれ探ろうとする者は皆無だった。誰も問いを口にするのがないまま、メディアに規定された我々の記憶から、カルロス・カルバージョの事件は少しずつ消えていった。落胆している暇さえ与えてはくれない暴力の日々に息が詰まっていたコロンビア人は、黄昏の影のようにこの無害な男を忘却の彼方へと追いやった。しばらくすると、この男のことなど思い起こす者もいなくなつた。

私がこれから語ろうとする物語の一部は、この男と関わっている。深い付き合いがあつたとまでは言えないが、真実から目を背けようとする者にはのみ許された親交ぐらいはあつたと思う。だが、物語の本题に入る前に——予めお断りしておくが、回りくどいだけで掴みどころのない話だ——、私と彼を引き合わせた人物について触れておかねばならない。その後私の身に起こつた一連の出来事は、フランシスコ・ベナビデスと出会つたいきさつを踏まえていなければ説明することができない。昨日も、この痛ましい話の再現にあたつて零れ落ちたことが何もないか確かめておこうと思つて、これから掘り起こすことになる出来事の舞台となつたボゴタ市街の場所をいくつか回つたが、気づいてみると私は、知らずにすめばよかつたこんな話のすべてをなぜ知ってしまったのか、思わず声に出して問いかけていた。死者について考えながら、いや、それどころか死者と共存し、言葉を交わし、嘆きの声に耳を傾け、彼らの苦しみを和らげてやることのできない無力感を嘆きながら、なぜこれほど長い時間を過ごすことができたのだろうか？そして、驚いたことに、実はすべての始まりは、ベナビデス医師が何気なく放つた何気ない招待の言葉にあつたのだ。あの時は、苦境にあつた私に貴重な時間を割いてくれた人の招待をむげに断ることはできない、そんな配慮から、日常生活に溢れる些事をこなすようなつもりで、顔だけ出しておこうかと思つてはいなかつた。振り返ってみればそれが大きな間違いで、あの夜起こつた出来事が恐怖の歯

車を動かしたのであり、それを止めるには、この本、自分が犯したわけでもないのに背負い込んだ罪の償いとして、この本を書かねばならなかったのだ。

フランシスコ・ベナビデスは国で最も権威ある外科医の一人であり、モルト・ウィスキーの愛飲家であるほか、飽くなき読書家でもあったが、予防線とばかり、作り話より歴史を好むことを常日頃から強調しており、趣味というより修行のために私の小説を一冊読み終えたのも、単に患者への感情移入からにすぎない。厳密に言えば彼は彼の患者ではなかったが、最初に彼と連絡を取るきっかけになったのは私の健康問題だった。一九九六年、パリに移って数週間後のある晩、必死にジョルジュ・ペレックのエッセイを読み解いている時に、左顎の下あたりに違和感を覚えて触ってみると、皮膚の下にビー玉のようなしこりがあった。続く数日間にビー玉は次第に大きくなっていったが、新天地に移ったばかりで、一刻も早く新しい街の習慣を身に着けて適応しようと逸るあまり、その変化にまったく気づかなかった。やがてしこりは膨れ上がって顔を歪め、街行く人から同情の目を向けられたばかりか、学友の一人など、怪しい伝染病にかかるのを恐れて私に挨拶すらしなくなった。すぐに検査が始まったが、パリの医師が束になってかかっても、原因を突き止めることはできず、名前も思い出したくない一人の医師など、リンパ癌ではないかと言いつつ始末だった。そこで私の家族はベナビデスに助けを求め、どういう可能性があるのか訊ねてみた。ベナビデスは腫瘍の専門医ではなかったが、ここ数年は末期患者の対応にあたることも多く、あくまで私事として、報酬も取ることなく面倒な作業をこなしているという。電話で写真を送ることもできない、カメラ内蔵のコンピュータもない時代のことであり、大西洋の反対側にいる者に対して診断を下すのは、無責任と言えばそのとおりで、博識なベナビデスは貴重な時間を割いて見解を示し、海を越えた彼の助言は、最終診断にも劣らぬほど私を勇気づけてくれた。一度など、「本当にそんな病気ならとっくに見つかっているはずですよ」と言われたことがあったが、この転倒した論理こそ、まさに溺れる者に投げられた浮き輪で

あり、穴が開いていようが、それに飛びつくのは当然だった。

数週間後——その間、私は無時間的時間の真ただ中にあり、二三歳にして人生を終える現実的可能性を突きつけられながらも、あまりのショックに茫然として、本物の恐怖も悲しみも感じなかった——、国境なき医師団の一員で、当時アフガニスタンの恐怖体験から戻ってきたばかりだった総合医とベルギーで偶然知り合うことがあり、一目見ただけで彼は、すでにヨーロッパからは消えたが「第三世界」（私は鉤括弧付きで書いたが、彼が特にこの言葉を強調したわけではない）には残っている可能性のある肺結節腫だと診断を下した。リージュの病院に入院して暗い部屋に隔離された私は、血を沸き返らせるような検査の後、麻酔をかけられて顎の下から顔の右側を切開され、取り出された腫瘍は培養液に入れられた。一週間後、費用のかかる検査などするまでもなく、総合医の診断が裏付けられた。続く九カ月間、小便を毒々しいオレンジ色に染める三種類の抗生物質を飲み続けるうちに、腫れは引き始め、ある朝、目が覚めると枕が濡れており、何かが破裂したことに気がついた。その後、顔の輪郭は常態に戻り始め——ただし、顔には二つの傷痕が残り、その一方はほぼ目につかなかったが、手術の痕はかなり目立った——、傷痕のせいでその後もずっと完全に忘れることはできなかつたが、ようやくこの話は幕引きになった。ベナビデス氏に借りがあるという思いはその後もずっと私の頭から離れず、九年後、初めて医師と顔を合わせた時には、お礼の言葉すら伝えていなかったことが真っ先に脳裏をよぎった。それで、あれほど簡単に招待を受けることになったのだろう。

サンタフェ病院のカフェで彼と出くわしたのはまったくの偶然だった。妻と私はすでに二週間も入院生活を送っており、やむなくボゴタでの滞在を引き延ばして、必死に緊急事態を乗り切ろうとしている最中のことだった。八月初旬、独立記念祭の翌日に到着した我々は、ヨーロッパの夏休暇に合わせてしばらく家族と過ごした後、出産の前にバルセロナへ戻るつもりでいた。妊娠二四週目まではすべてが順調であり、双子の出産は自動的に「高リスク」扱いになることがわかっていた我々は、毎日感謝の気持ちに溢れていた。だが、ある日曜日、奇妙な痛